

推しのホストにVIP
ルームで正体を暴かれ
てシャンパンより甘く
注がれるカントボーイ

「んっ……♡ れ、蓮司さ……っ♡♡」

重ねられた唇の奥からシャンパンの残り香が広がる。甘くて、少し苦い。蓮司の舌が躊躇いなく口の中に入ってきて、もう何も考えられなくなった。

VIPルームの壁一面を覆う鏡に、黒革のソファの上で押し倒されている自分の姿がくっきりと映っていた。

「は……っ♡ んんっ♡♡ ……ま、まって……っ♡♡」

「待たねえ」

低い声が鼓膜の奥まで震わせた。営業の声じゃない。推しの顔が、こんなに近くにあったことなんて一度もなかった。

蒼は蓮司の肩を押し返そうとしたけれど、シャンパンを飲みすぎた腕にはまるで力が入らなかった。

さっきまでフロアで飲んでいた。就活の最終面接に落ちたストレスで普段の倍以上飲んでしまい、気分が悪くなった僕を蓮司が「俺が見とくから」とVIPルームに連れてきた。

介抱してくれるのだと思った。水を持ってきてくれて、額にはおしぼりを載せてくれて。優しかった。本当に優しかった。

——トイレに行きたいと言ったのが、全部の始まりだった。

「ごめ……っ♡♡ 蓮司さん、ごめんなさ……っ♡♡」

「何謝ってんだよ」

蓮司の親指が、蒼の頬に残っている涙の筋をゆっくり拭う。指先がこめかみまで辿って、そのまま耳の後ろに回って、顎を持ち上げられた。逃げ場のない手つきだった。

トイレでベルトを外してもらった時、下着を下ろされた時、蓮司の手がぴたりと止まった。

男性器がない。代わりにあるのは、女性器。

——推しに、一番知られたくない秘密を見られてしまった。

あの時蒼は、もう終わりだと思った。気持ち悪いと言われる。嫌われる。もうこの店には来られない。

けれど蓮司の口から出た言葉は——

「こっちの方がいい」

だった。

「ずっと気になってた。お前のこと。客としてじゃなく、男として」

そう言って蓮司は蒼を抱き上げ、VIPルームのソファに寝かせて、「客じゃなくて、男として抱かせろ」と言った。

返事をする前にキスをされた。それが今だ。

「んっ……♡ んんっ♡♡ はっ♡ れ、蓮司さっ……舌……っ♡♡」

蓮司の舌が蒼の口の中を好き勝手に蹂躪する。舌を吸われ、歯列をなぞられ、舌の裏側まで舐め上げられて、蒼はもう自分の口が自分のものじゃないみたいだった。唾液が喉の奥に

流れ込んできて、嚥下するたびに蓮司の味がお腹の中まで染みていく。

「ふっ♡ ふっ♡ んんんっ♡♡ ……は……っ♡♡」

長いキスがようやく途切れて、唾液の橋が二人の唇の間でつやりと光った。蒼の目には涙が溜まっていた、頬は真っ赤で、唇は蓮司の唾液でてらてらと濡れている。

間接照明の淡いオレンジの灯りの中で、蓮司がその顔をじっと見下ろしていた。

「泣くな」

「……だって……♡♡」

「泣いていいって言ったのは撤回する。泣くんじゃなくて、もっと別の声出させてやるから」

蓮司の手がシャツの裾からすると潜り込んできた。

「ひっ……♡♡」

指先が腹部を這い上がっていく。筋肉のない柔らかいお腹を撫でられて、鎖骨の窪みをなぞられて、そこからゆっくりと胸に降りてくる。

（やだ……♡♡ 心臓の音……聞こえてないかな……♡♡）

蒼の心臓がどくどくと暴れている。蓮司の指先がそれを辿るように胸の上を滑って——乳首に触れた瞬間、腰がびくんと跳ね上がった。

「あっ♡ やっ……♡♡ そこ……っ♡♡」

「敏感だな。こんなに固くなってる」

蓮司の親指がくるくる♡くるくる♡と乳首の小さな突起を転がした。Tシャツの上からでもはっきりわかるくらいツンと尖ってしまっていた乳首が、直接触れた指の温度で更に硬くなっていく。指の腹のざらりとした感触が、びりびりと胸から下腹部まで痺れを走らせた。

「やっ♡ やだ♡ んっ♡♡ ……蓮司さ……乳首、つまんじや……っ♡♡」

「ここ、どれくらい弄られたことあんの」

「なっ……ないです……っ♡♡ 自分でも、さわったこと……っ♡♡」

「マジか」

蓮司の目が一瞬ぎらりと光った。それは営業の笑みとは全く違う、剥き出しの獣みたいな色だった。

(……推しが……こんな顔するんだ……♡♡)

怖いのに、嬉しかった。自分のせいで蓮司がこんな顔をしている。そのことに、お腹の奥がきゅう♡と疼いた。

シャツを一気に脱がされた。

「あっ……♡♡ や……♡♡」

蒼の上半身が露わになる。華奢で色白な身体に、ほんのり桜色の乳首がふたつ。さっきの愛撫で硬くなった突起が、間

接照明に照らされてツン♡ツン♡と主張している。蓮司はそれを見て低く息を呑んだ。

「……やべえ」

「見ないで……っ♡♡ はずかしい……っ♡♡」

「無理。見る」

蓮司が屈み込んで、右の乳首にちろ♡と舌先を這わせた。

「ひあっ♡♡ あっ♡♡ あっ♡♡ し、舌……っ♡♡ れんじさっ♡♡」

ちろ♡ちろ♡と舌先で突起を転がされ、次にはむっ♡と口に含まれて強く吸われた。蒼の身体が弓なりに反る。蓮司の口の中は熱くて湿っていて、その中で乳首がちゆる♡ちゆる♡と音を立てて嬲られている。

「あっ♡ あっ♡ すっ……吸わないでっ♡♡ やだっ♡♡ へんな感じ……っ♡♡」

蓮司は答えない。左の乳首を指で摘まみながら、右の乳首を舌でちゆる♡ちゆる♡と嬲り続けた。蒼が声を堪えようとするたびに、わざと吸い上げる力を強くする。唇と舌の吸引力が一段増すたびに、蒼の背筋がぞくぞくと震えた。

「んっ♡ んんっ♡♡ あっ♡ あっ♡ や……おなかのしたが……へんになる……っ♡♡」

下腹部がじわ♡と熱い。おまんこが、勝手に反応している。乳首を弄られているだけなのに、あそこがじわ……♡じわ……♡と濡れ始めていた。

（うそ……♡♡ 乳首触られてるだけなのに……おまんこが……っ♡♡）

自分の身体のことなのに全然知らなかった。乳首がこんなに気持ちいい場所だなんて。触られるとおまんこまで連動して、奥がきゅう♡っ疼いてしまうなんて。パンツの内側がじっとりと湿っていくのが分かって、恥ずかしくて太腿に力を込めた。

「……下、脱ぐぞ」

蓮司の手がズボンに——いや、さっきトイレで脱がされたまま、下着だけだった。蓮司が下着のウエストゴムに指をかける。

「やだっ♡♡ まっ……待って♡♡ ……見ないで……っ♡♡」

「さっき見た」

「それはっ……♡♡ あれはっ……♡♡」

「もう隠すな」

下着がするりと太腿を滑り落ちた。

蒼のおまんこが、淡い間接照明の下に晒される。

男の身体に、女性器。カントボーイの秘密。コンプレックスの全て。

そこは既にうっすらと愛液で光っていた。乳首を弄られただけで、こんなに。割れ目がてらてらと湿って、内側のお肉がほんのりと腫れぼったく膨らんでいる。

蓮司が息を呑む音が聞こえた。

「……きれいだな」

「きれいなわけ……っ♡♡ こんなっ……♡♡」

「きれいだよ。お前のここ」

蓮司の指が、そっと割れ目に触れた。

「ひっ……♡♡♡」

身体がびくりと跳ねた。

蓮司の指先に、とろ♡と愛液が絡みつく。温かくて粘りのある液が、蓮司の指の腹をぬるりと濡らした。

「……すげえ濡れてんな」

「やだ……♡♡ 言わないでっ……♡♡」

「何で。事実だろ。お前のおまんこ、俺が乳首舐めただけでこんなにとろとろになってんだよ」

「あっ♡♡ あっ♡♡ そんなこと言わないで……っ♡♡ はずかしい……♡♡♡」

蓮司の指がクリトリスに触れた。

「ひあっ♡♡♡♡」

蒼の腰がガクンと浮いた。

「そっ……そこっ♡♡ さわっちゃだめっ♡♡♡」

「ここが気持ちいいんだろ。ビクビクしてる」

指先でくるくる♡くるくる♡とクリトリスを弄る。ほんの小さな突起なのに、触れられた瞬間に全身に電気が走るような快感が駆け抜けた。

（やだ……♡♡ こんな小さなお肉が……こんなに気持ちいいなんて……♡♡♡）

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ れ、蓮司さんっ♡♡ やだっ♡♡ 変な声でちゃ……っ♡♡」

「変じゃねえよ。もっと聞かせろ」

蓮司の声が掠れている。営業の甘さなんか微塵もない。蒼のおまんこを触りたくて触りたくてたまらないという欲望が、その指先のかすかな震えから伝わってきた。

くり♡くり♡くり♡と親指がクリトリスの包皮を剥くように押し上げて、剥き出しになった敏感な芯を直接撫でる。

「ひいっ♡♡♡ やっ♡ やっ♡ そこ直接はっ♡♡ だめっ♡♡♡」

「嫌なのか？」

「っ……♡♡ きもちっ……♡♡ きもちよすぎてっ……♡♡♡」

「……正直じゃん。かわいい」

蓮司の中指が割れ目をゆっくり下に辿って、入り口に触れた。くちゅ♡と小さな水音がして、蒼は顔を両手で覆った。

「音っ♡♡ エッチな音しちゃってる……っ♡♡」

「お前の身体が出してる音だよ。お前のおまんこが俺の指求めてんの」

「ちがっ……♡♡ そんなのっ……♡♡」

「嘘つくな。ここ、ひくひくしてんぞ。入れてほしいって言ってるみたいだ」

くちゅ♡くちゅ♡と入り口を指の腹で撫で回しながら、蓮司はわざと中に入れなかった。焦らされる。焦らされて、おまんこの奥がきゅう♡と収縮して、愛液がどんどんあふれてくる。入り口のお肉が蓮司の指先をくにくに♡と挟み込んで、もっと奥に引き入れようとしている。

（やだ……♡♡ おまんこが……勝手に……蓮司さんの指を欲しがってる……っ♡♡♡）

「あっ♡ あっ♡ れんじさっ♡♡ ……いれてっ♡♡」

気がついたら自分から言っていた。蓮司の目がぎらりと光る。

「何を？」

「っ……♡♡ ゆ、指……♡♡ おまんこに……いれてっ……♡♡♡」

「いい子だ」

ずぷ♡♡

蓮司の長い中指が、蒼のおまんこの中にゆっくりと沈んでいった。

「はああっ♡♡♡ あっ♡♡ あっ♡♡ はいってるっ♡♡ ゆびっ♡♡ はいってきてるう……っ♡♡♡」

人生で初めて、自分の中に他人の指が入る感覚。蓮司の指は太くて長くて硬くて、処女のおまんこを内側からじわじわと押し広げていく。柔らかい肉壁が異物を受け入れようとして、きゅう♡きゅう♡と指を締め付けた。指の関節のごつごつした凹凸が、中のお肉をこりこり♡と擦って、蒼は声にならない声を漏らした。

「きつ……♡ 中すげえ熱い……」

蓮司自身も息が荒かった。蒼の中が指をきゅう♡きゅう♡と吸い付くように締め付けてきて、指一本入れただけで理性が飛びそうになっている。指の腹に伝わる柔らかくて熱いお肉の感触が、蓮司の獣を呼び覚ます。

蒼は蓮司の膝の上に向かい合わせて座らされていた。正面には鏡。自分が蓮司の膝の上で脚を開かされて、おまんこに指を入れられている姿がまざまざと映っている。

「やっ……♡♡ 見たくないっ♡♡ そんな格好……♡♡」

「見ろよ。お前のおまんこ、俺の指でこんなにとろとろだぞ」

蓮司が鏡越しに蒼の目を見つめながら、指をゆっくり奥まで押し込んだ。

「ひっ♡♡ んっ♡♡ おくっ♡♡ おく……つかれ……っ♡♡♡」

指の先端が奥の壁に触れるたびに、お腹の奥がキュン♡と甘く痙攣する。今まで感じたことのない場所が指先に突かれて、蒼はぎゅっと蓮司のシャツの胸元を掴んだ。

蓮司が指を動かし始めた。ゆっくり引いて、また入れて、引いて、入れる。くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡と淫らな水音がVIPルームの防音壁に反響した。指が引かれるたびにおまんこのお肉が名残惜しそうに指を追いかけて、また押し込まれるときゅうっ♡と嬉しそうに吸い付く。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ だめっ♡♡ なにか……きちゃう……っ♡♡」

「イキそうなのか？」

「わかんないっ♡♡ でも……おなかの奥がっ……きゅうってなってっ……♡♡♡」

蓮司がもう一本指を足した。二本の指がおまんこの中をぐちゅ♡ぐちゅ♡と掻き回しながら、親指はクリトリスの芯を捏ね続けている。

「あっ♡♡ あっ♡♡ ふたっ♡♡ ゆびふたっ入ってるっ♡♡ おまんこひろがっちゃってるう……っ♡♡♡」

鏡に映る自分の姿がわいせつすぎて直視できない。でも蓮司に「見ろ」と言われて、目が離せなくなっている。

おまんこが蓮司の指に開かれて、とろとろの愛液が指の動きに合わせて白く泡立っている。二本の指の隙間から愛液がとろ……♡と糸を引いて垂れて、蓮司の掌をぬるぬるに濡らしていた。自分のおまんこがこんなにも淫らに反応することを、蒼は今この瞬間に初めて知った。

蓮司の指がおまんこの壁のある場所をズリ♡と撫でた。

「ひあっ♡♡♡♡」

一段と強い快感が背筋を駆け抜けた。

「ここか」

蓮司が同じ場所を集中的に擦り始める。ざらざらした壁を、指の腹でぐり♡ぐり♡と。

「あっ♡♡ あっ♡♡ あっ♡♡ そこっ♡♡ そこだめっ♡♡♡
おかしくなるっ♡♡♡」

「おかしくなれよ。俺が見ててやるから」

(だめ……♡♡ そこ擦られると……おなかの奥がとろとろに溶けるっ♡♡♡)

ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡と指が暴れる。クリトリスを親指で押し潰しながら、中のざらざらを容赦なく擦り上げる。蒼の腰がガクガク震えて、蓮司の首にしがみついた。蓮司の肩に額を押し付けると、蓮司の香水と汗の混じった匂いがした。甘くてどこか獣じみた匂い。その匂いがおまんこの奥を更にきゅうん♡♡と締め付けさせた。